

避喧松下養殘觴。 満案有書聊可娛。 誰知人間真男子。 支顧獨看地球圖。

## 第八

## 小松帶刀小傳

ス。忠禮大ニ懼レ、首事者ナ殺シテ降ナ納レ、先鋒ト爲リ、暴ナ討シテ罪ナ償ゾト請フ。是ヨリ先キ、幕府義男ノ士、寛永寺ニ據リ、彰義隊ト稱ス。八郎、謂ラク「東西犄角、或ハ以テ志ヲ得ベキ也」ト。已ニシテ俄ニ官軍ノ勦滅スル所ト爲ル。八郎ノ部下、之ヲ聞テ逃竄相踵ク。八郎切齒シテ曰ク「怯夫、多シト雖近、何ヲカ爲サン、吾輩數十人ニシテ足レリ。」ト。官軍ト大ニ山下ニ戰フ、衆寡敵セズ、死傷零ガ盡ク。八郎、圍ナ脱シテ三枚橋ニ至ル。忽ナ見ル兵士七八人、旗ヲ水上ニ樹ツルヲ以テ我兵ト爲シ、近ケハ、則ナ敵兵也。及ナ揮ヒ、争ヒテ前ム。一人アリ、八郎ナ擊テ其左腕ヲ断ツ。八郎屈セズ、大喝一聲、右手ヲ揮ヒ、斬テ之ヲ斃シケレバ敵皆驚キ散ス。八郎、自ラ其創ム、吮フ、血迸シリテ淋漓止マズ、我兵、後レテ至リ、扶ケテ之ヲ裹ミ、逃レテ無海ニ至リ、榎本武揚ノ駕スル所ノ蟠龍艦ニ入り、療スルト、數十日ニシテ、稍ヤ癒ユ。乃ナ銃ヲ斷臂ニ托シ、右手ヲ以テ之ヲ放テ曰ク「右臂ニシテ在リ、猶一戰スベキ也」ト。八月、武揚、總督府ノ命シテ諸艦ヲ収ムルト聞キ、急ニ銷ナ波ギ、北海ニ走ル。八郎、三加保鑑ニ駕シ、之ニ從フ。洋中、颶風ニ遇ヒ、漂ヒテ銚子港ニ至ル。艦壞レ、死スル者數十人。八郎等、逃レテ下總ニ匿レ、居ル数日。去ヲ友人ニ横濱ニ投ス。友人皆勧メテ静岡ニ往キ、徳川氏ニ歸セシメントス。八郎、肯シセズ。日ク「吾レ復官軍ナ見ルコト欲セズ」ト。遂ニ請テ外國船ニ駕シ、箱館ニ入り、武揚等ト合ス。官軍、箱館ヲ破ル。八郎、殊死力戦、銃丸ノ

傷ツク所ト爲ル。而カモ猪治スヘシ。八郎曰ク「吾レ終ニ官軍ト共ニ並立スル「能ハズ」」ト。右臂ニ刃ヲ執リ、自ラ其喉ヲ刺シテ死ス。時ニ年廿七。』

八郎、元ト武伎ナ以テ著ハル。而シテ學ナ好ミ、長谷部是水軒ニ就テ、業ナ受ク。天資剛勇、風姿雰爽、白皙長身、精悍トシテ、晝生ノ如シ。』

本山小太郎、八郎ト交リ厚ク、八郎ノ傷ナ負テ夙スルヤ、爲ニ創ナ洗ヒ、業ナ傳ケ、昼夜看護、怠ラズト云フ。』

八郎平生親々所ノ妓アリ。阿島ト稱ス。八郎ノ死ナ聞クヤ。慟哭シテ死セント欲ス。後、人ト語リ潜然トシテ泣ク。忌日毎ニ、佛ニ供シテ以テ冥福ヲ祈ルト云フ。』

## 第四

## 近藤勇小傳。

近藤勇、名ハ昌宣、小字ハ勝太、武州多摩郡石田村ノ人。父チ宮川久二ト曰フ、勇ハ、其第三子タリ。文久三年春、將軍家茂、詔ナ奉シテ京師ニ入ル。時ニ海内騒擾、西郷、浮浪ナ叛喰シテ以テ幕府ヲ窺モノアリ。浮浪、動モスレバ陰ニ投シテ以テ幸ナ徵メント欲ス。議者、謂ラク、網羅錄用、或ハ借

内容見本  
(62%縮小)

小松帶刀一名ハ清廉幼字ハ倚五郎、後帶刀ト改ム、威島顯闇ノ士也。帶刀、藩ニ仕ヘ、諸要職ナ歷テ軍役掛ト爲ル。元治元年、七月、長人、禁闈ヲ犯ス、諸藩ノ兵、防禦甚々苦ム、時ニ帶刀、京師ニ在リ、命ナ奉ジ、薩軍ナ率ヰテ之ヲ討シ、斬獲スル「三十九人。遂ニ長軍ヲ敗ル。翌日、長軍、嵯峨、天王寺ニ在リト聞キ、又之ナ攻ム、至レハ、則ナ已ニ逃レ去ル。因テ火ヲ放テ歸ル。九月、敵五百石ヲ賞加ス。慶應二年丁卯十月、將軍慶喜公ニ帶刀及ヒ後藤象二郎ナ徵シ、諭フニ天下ノ大計ナ以テス、遂ニ二人ノ言ナ嘉納シ、政權奉還ノ議ナ決ス。戊辰伏見ノ役、帶刀、薩ニ留マリ、足痛ニ罹リ、步行スルヲ得ズ、病ナ温泉ニ養フ。故ニ此戰ニ與ラザリキ。壬辰維新ノ際、京師ニ召サレテ參與ト爲リ、總裁局顧問ニ任シ、尋テ外國事務局判事ナ兼ス。明治元年三月、從四位ニ叙シ、二年賞典錄干石ナ賜ハル。三年六月廿七日、病ニテ卒ス。

薩州ノ「勤王論」首倡者トシテ、全藩ナ鼓舞シ、國論ナ一定セシムルニ當リ。其功ノ大ナルハ、西郷南

小松帶刀小傳

## 戊辰戦史

戊辰の役は、振古未嘗有の大革命なり、政体は一變し、制度文物は一新し、社會の組織、人情好尚な一變せり、其風雲に際會して貴賤功名を成しかるもの、其紛雜に擠せられて榮華勢利を失へるもの、甚能啻ならず、振古未嘗有の大忠筆あつて而して後始めて之を悉すべし、世戊辰革命に關する史書乏しからず、未だ能く之を悉せるものあらず、紫山氏少壯の才筆史家として今専ら力ん茲に用ひ全部十二巻の大冊中に、此の大革命の事情を描さんとす、戊辰改革の由て來る所、改革の成れる次第及今日あるを致せる所以等、明鏡を把て妍媸を照すが如くならん幸に江湖の愛讀を請ふ

## 博文館藏版

九九

## 戊辰戦史卷六

北越戦闘(上) 紫山川崎三郎著

## 第一

## 東西兩軍ノ形勢。

上野ノ戦争、及ヒ總野ノ戦争以來、東軍皆奥羽地方ニ走ル。奥羽ハ、東軍ノ根據ニシテ、其兵、慄悍驍勇、西南ノ勁敵ナリ。而シテ、戊辰戦争ノ活劇ハ、實ニ北越及ヒ奥羽ノ役ニ在リトス。』

官軍ハ、薩長ノ兵、最トモ主力ヲ占メ、加州、尾州、土州、大垣、越前、高田、松代、松本等ノ諸藩兵、之ニ加ハリ、後ニ至リ、西國ノ諸藩、陸續トシテ兵ヲ出シ、總軍凡ソ十万人ニ至ル。砲ハ、各藩、多キハ十門ヨリ少ナキハ、數門ヲ備フ。然レバ、戦域ハ、北越、及ヒ奥羽三百リ、兵數常ニ其不足ヲ告ゲ、又砲ノ如キハ、險阻ノ地形ナルヲ以テ、運搬ニ困難ナルヨリ、其從フモノハ、十二斤砲ノミ。』

東軍ハ、會津藩、實ニ其主動者ニシテ、仙臺、米澤、庄内、南部、二本松、三春、棚倉等ノ二十餘藩、之ガ聯合ヲ爲シ、其總軍、六七万ニ至ル。砲ハ、諸藩皆數門ヲ有スレバ、概予國境ノ諸要地ヲ分守スルヲ以

## 東西兩軍ノ形勢

一

## 東西兩軍ノ形勢

二

テ其比、甚タ少ナク、唯地形ト城塞トヲ以テ、之ヲ補フベキノミ。又其國境ノ外ニ出テ、守備ヲ爲スモノハ、仙臺、米澤、會津ノ兵ニシテ、最トモ精銳ナリトス。砲ハ、運搬ニ困難ナルヨリシテ、巨大ノモノ、ナキハ、官軍ト異ナル無シ。』

官軍ノ戰畠ハ、首軍ハ、先ツ北陸ヲ畠取シ、繼テ其方嚮ヲ東ニ轉シテ以テ會津ニ突入セント欲シ、又別軍ハ、白河口ニ向ヒ、其勢至堂道ハ、一二ノ兵ヲ置テ、之ヲ監視セシメ、其他ハ、先ツ進ミテ白石ヲ占領シ、或ハ之ヲ占領セザルモ、敵ノ援路ヲ絶チ、轉シテ以テ會津ニ進撃セント欲シ、又一軍ヲ首軍ト別軍トノ中間ニ進メ、直ニ之ヲシテ會津ヲ擣カシメント欲シ、尙秋田、津輕ノ諸藩ヲシテ、飽クマテ歸順セシメ、以テ敵背ニ逼ラント欲スルニ在リ。蓋シ首軍、該方面ニ向ハ、敵情ヲ奪ヒ、別軍ナシテ此間ニ乘シテ敵巢ヲ擣カシムベク、又此方面ハ、秋田、津輕ニ近キナ以テ、或ハ之ト合スペク、又別軍、先ツ白石ヲ占領セバ、該地ハ、聯合軍ノ會盟地ナルヲ以テ、或ハ其聯合ヲ分離セシムベク。又中間ノ一軍ハ、敵兵ノ、我首軍ト別軍トヲ分離セント欲スル企圖ヲシテ、意ノ如クナラサラシムベク、而シテ秋田、津輕ノ諸藩、果シテ官軍ニ屬セバ、則チ敵ヲシテ後顧ノ患アラシム、從テ其兵ヲシテ割カシムベシ。是レ官軍戰略ノ大体ニシテ、此計畫ヲ立テタル者ハ、官軍ノ兵術家、長州ノ俊傑、軍務局判事、大村益次郎其人ナリ。』

# 戊辰戦史 目次

<b>第一卷</b>	1 大政奉還の奏聞 2 米艦来航 外交の開始 3 水戸烈公及び東湖の対外政策 4 条約締結 堀田政略 井伊政略	5 幕軍進発の状勢 6 官軍の戦備 7 鳥羽方面戦闘 8 伏見方面戦闘 9 淀方面戦闘 10 橋本方面戦闘 11 幕軍敗衄の情状 12 京都の事情、及び島津久光の事	13 伏見鳥羽戦闘の勝敗に於ける点評 14 京都の事情、及び島津久光の事
<b>第二卷</b>	1 公武合体論 2 寺田屋騒動 3 将軍の上洛 親征の中止 4 蛇御門の変 5 大和の乱 6 生麦事件 鹿児島事変 7 筑波の乱 8 長征の役 再征の役 9 幕府の危機 付録・馬閥の役 付録・長藩の戦備 付録・長軍、米艦を砲撃す 付録・長軍、仮艦を砲撃す 付録・長軍、仮艦を邀撃す 付録・長軍、仮艦を邀撃する 付録・防長の役 (1) 幕府の戦備、及び長藩の戦備 (2) 大島方面戦闘 (3) 尾瀬川方面戦闘 (4) 石見方面戦闘 (5) 小倉方面戦闘	1 官軍の東征 2 慶喜公の恭順、官軍江戸城を領す 3 遠州の勤王 4 勝沼戦闘 5 上野戦闘 6 締盟各国と日本朝廷との関係 付録・人物小伝 土方歲二	1 官軍の東征 2 慶喜公の恭順、官軍江戸城を領す 3 遠州の勤王 4 勝沼戦闘 5 上野戦闘 6 締盟各国と日本朝廷との関係 付録・人物小伝 勝義邦、大久保一翁、小松 土方歲二
<b>第三卷</b>	1 碓杵の東走 2 宇都宮方面戦闘 流山の役 3 字都宮方面戦闘 結城の役 4 宇都宮方面戦闘 安塚の役 5 船橋方面戦闘 官軍の勝利 6 日光方面戦闘 日光の進軍 7 赤谷・金銅山・及津川方面戦闘 8 津川及陣峯方面戦闘 9 館原方面の戦闘 10 飯寺方面の戦闘、及市川 11 大田原方面戦闘 大田原の役 12 大田原方面戦闘 大田原の役 13 大田原方面戦闘 官軍の進撃 14 大田原方面戦闘 火王嶺の繫 付録・北越戦記別録 北越戦記(1)-(4)	1 幕将の東走 2 宇都宮方面戦闘 流山の役 3 字都宮方面戦闘 結城の役 4 宇都宮方面戦闘 安塚の役 5 船橋方面戦闘 官軍の勝利 6 日光方面戦闘 日光の進軍 7 赤谷・金銅山・及津川方面戦闘 8 津川及陣峯方面戦闘 9 館原方面の戦闘 10 飯寺方面の戦闘、及市川 11 大田原方面戦闘 大田原の役 12 大田原方面戦闘 大田原の役 13 大田原方面戦闘 官軍の進撃 14 大田原方面戦闘 火王嶺の繫 付録・北越戦記別録 北越戦記(1)-(4)	
<b>第四卷</b>	1 北越戦闘(上) 2 北越諸藩の会同 3 飯山及び小出島方面の戦闘 4 鮫波及び塙山方面の戦闘 5 鰐嶺戦闘 6 鰐嶺戦闘 7 長岡戦闘・長岡城の陥落 8 杉沢及び与板方面戦闘 9 今町方面戦闘 10 持立及び福島方面の戦闘 11 土谷方面に於る戦闘 12 長岡戦闘 東軍長岡恢復の戦略 13 長岡戦闘 東軍長岡城を恢復す 14 長岡戦闘 官軍再び長岡城を陥いる 付録・人物小伝 栗本鉄雲、岡本武雄	1 北越戦闘(下) 2 長岡戦闘 東軍長岡恢復の戦略 3 長岡戦闘 東軍長岡城を恢復す 4 長岡戦闘 官軍再び長岡城を陥いる 付録・人物小伝 中嶋源蔵、日時隆之進 付録・秋田戦記別録 南部征討記(1)-(5)	1 北越戦闘(上) 2 北越諸藩の会同 3 飯山及び小出島方面の戦闘 4 鮫波及び塙山方面の戦闘 5 鰐嶺戦闘 6 鰐嶺戦闘 7 長岡戦闘・長岡城の陥落 8 杉沢及び与板方面戦闘 9 今町方面戦闘 10 持立及び福島方面の戦闘 11 土谷方面に於る戦闘 12 長岡戦闘 東軍長岡恢復の戦略 13 長岡戦闘 東軍長岡城を恢復す 14 長岡戦闘 官軍再び長岡城を陥いる 付録・人物小伝 栗本鉄雲、岡本武雄
<b>第五卷</b>	1 秋田戦闘 2 天童城の陥落 3 秋軍、莊内征討の形勢 4 官軍の防備 5 莊軍の進取 新荘城の陥落 6 莊内藩の土風及び兵備 7 天童城の陥落 8 東軍松前を陥ぐ 9 仙台藩の降伏 10 津軽方面戦闘 盛岡兵の侵入 11 長浜方面の戦闘 盛岡藩の降伏 12 荘内方面戦闘 13 荘内方面戦闘 14 荘内方面戦闘 15 荘内方面戦闘 16 荘内方面戦闘 17 秋田藩の勤王 18 仙台藩の方嚮 左衛門	1 秋田戦闘 2 天童城の陥落 3 秋軍、莊内征討の形勢 4 官軍の防備 5 莊軍の進取 新荘城の陥落 6 莊内藩の土風及び兵備 7 天童城の陥落 8 東軍松前を陥ぐ 9 仙台藩の降伏 10 津軽方面戦闘 盛岡兵の侵入 11 長浜方面の戦闘 盛岡藩の降伏 12 荘内方面戦闘 13 荘内方面戦闘 14 荘内方面戦闘 15 荘内方面戦闘 16 荘内方面戦闘 17 秋田藩の勤王 18 仙台藩の方嚮 左衛門	
<b>第六卷</b>	1 北越戦闘(上) 2 北越諸藩の会同 3 飯山及び小出島方面の戦闘 4 鮫波及び塙山方面の戦闘 5 鰐嶺戦闘 6 鰐嶺戦闘 7 長岡戦闘・長岡城の陥落 8 杉沢及び与板方面戦闘 9 今町方面戦闘 10 持立及び福島方面の戦闘 11 土谷方面に於る戦闘 12 長岡戦闘 東軍長岡恢復の戦略 13 長岡戦闘 東軍長岡城を恢復す 14 長岡戦闘 官軍再び長岡城を陥いる 付録・人物小伝 河井繼之助、伊地知正治 吉田大八、近藤貢、三浦権 太夫、中島永胤	1 北越戦闘(下) 2 長岡戦闘 東軍長岡恢復の戦略 3 長岡戦闘 東軍長岡城を恢復す 4 長岡戦闘 官軍再び長岡城を陥いる 付録・人物小伝 中嶋源蔵、日時隆之進 付録・秋田戦記別録 南部征討記(1)-(5)	1 北越戦闘(上) 2 北越諸藩の会同 3 飯山及び小出島方面の戦闘 4 鮫波及び塙山方面の戦闘 5 鰐嶺戦闘 6 鰐嶺戦闘 7 長岡戦闘・長岡城の陥落 8 杉沢及び与板方面戦闘 9 今町方面戦闘 10 持立及び福島方面の戦闘 11 土谷方面に於る戦闘 12 長岡戦闘 東軍長岡恢復の戦略 13 長岡戦闘 東軍長岡城を恢復す 14 長岡戦闘 官軍再び長岡城を陥いる 付録・人物小伝 河井繼之助、伊地知正治 吉田大八、近藤貢、三浦権 太夫、中島永胤
<b>第七卷</b>	1 属地戦闘 2 荘内方面戦闘 3 荘内方面戦闘 4 荘内方面戦闘 5 荘内方面戦闘 6 荘内方面戦闘 7 津軽方面戦闘 8 津軽方面戦闘 9 津軽方面戦闘 10 津軽方面戦闘 11 津軽方面戦闘 12 津軽方面戦闘 13 津軽方面戦闘 14 津軽方面戦闘 15 津軽方面戦闘 16 津軽方面戦闘 17 津軽方面戦闘 18 津軽方面戦闘 19 津軽方面戦闘 20 津軽方面戦闘 21 津軽方面戦闘 22 津軽方面戦闘 23 津軽方面戦闘 24 津軽方面戦闘 25 津軽方面戦闘 26 津軽方面戦闘 27 津軽方面戦闘 28 津軽方面戦闘 29 津軽方面戦闘 30 津軽方面戦闘 31 津軽方面戦闘 32 津軽方面戦闘 33 津軽方面戦闘 34 津軽方面戦闘 35 津軽方面戦闘 36 津軽方面戦闘 37 津軽方面戦闘 38 津軽方面戦闘 39 津軽方面戦闘 40 津軽方面戦闘 41 津軽方面戦闘 42 津軽方面戦闘 43 津軽方面戦闘 44 津軽方面戦闘 45 津軽方面戦闘 46 津軽方面戦闘 47 津軽方面戦闘 48 津軽方面戦闘 49 津軽方面戦闘 50 津軽方面戦闘 51 津軽方面戦闘 52 津軽方面戦闘 53 津軽方面戦闘 54 津軽方面戦闘 55 津軽方面戦闘 56 津軽方面戦闘 57 津軽方面戦闘 58 津軽方面戦闘 59 津軽方面戦闘 60 津軽方面戦闘 61 津軽方面戦闘 62 津軽方面戦闘 63 津軽方面戦闘 64 津軽方面戦闘 65 津軽方面戦闘 66 津軽方面戦闘 67 津軽方面戦闘 68 津軽方面戦闘 69 津軽方面戦闘 70 津軽方面戦闘 71 津軽方面戦闘 72 津軽方面戦闘 73 津軽方面戦闘 74 津軽方面戦闘 75 津軽方面戦闘 76 津軽方面戦闘 77 津軽方面戦闘 78 津軽方面戦闘 79 津軽方面戦闘 80 津軽方面戦闘 81 津軽方面戦闘 82 津軽方面戦闘 83 津軽方面戦闘 84 津軽方面戦闘 85 津軽方面戦闘 86 津軽方面戦闘 87 津軽方面戦闘 88 津軽方面戦闘 89 津軽方面戦闘 90 津軽方面戦闘 91 津軽方面戦闘 92 津軽方面戦闘 93 津軽方面戦闘 94 津軽方面戦闘 95 津軽方面戦闘 96 津軽方面戦闘 97 津軽方面戦闘 98 津軽方面戦闘 99 津軽方面戦闘 100 津軽方面戦闘 101 津軽方面戦闘 102 津軽方面戦闘 103 津軽方面戦闘 104 津軽方面戦闘 105 津軽方面戦闘 106 津軽方面戦闘 107 津軽方面戦闘 108 津軽方面戦闘 109 津軽方面戦闘 110 津軽方面戦闘 111 津軽方面戦闘 112 津軽方面戦闘 113 津軽方面戦闘 114 津軽方面戦闘 115 津軽方面戦闘 116 津軽方面戦闘 117 津軽方面戦闘 118 津軽方面戦闘 119 津軽方面戦闘 120 津軽方面戦闘 121 津軽方面戦闘 122 津軽方面戦闘 123 津軽方面戦闘 124 津軽方面戦闘 125 津軽方面戦闘 126 津軽方面戦闘 127 津軽方面戦闘 128 津軽方面戦闘 129 津軽方面戦闘 130 津軽方面戦闘 131 津軽方面戦闘 132 津軽方面戦闘 133 津軽方面戦闘 134 津軽方面戦闘 135 津軽方面戦闘 136 津軽方面戦闘 137 津軽方面戦闘 138 津軽方面戦闘 139 津軽方面戦闘 140 津軽方面戦闘 141 津軽方面戦闘 142 津軽方面戦闘 143 津軽方面戦闘 144 津軽方面戦闘 145 津軽方面戦闘 146 津軽方面戦闘 147 津軽方面戦闘 148 津軽方面戦闘 149 津軽方面戦闘 150 津軽方面戦闘 151 津軽方面戦闘 152 津軽方面戦闘 153 津軽方面戦闘 154 津軽方面戦闘 155 津軽方面戦闘 156 津軽方面戦闘 157 津軽方面戦闘 158 津軽方面戦闘 159 津軽方面戦闘 160 津軽方面戦闘 161 津軽方面戦闘 162 津軽方面戦闘 163 津軽方面戦闘 164 津軽方面戦闘 165 津軽方面戦闘 166 津軽方面戦闘 167 津軽方面戦闘 168 津軽方面戦闘 169 津軽方面戦闘 170 津軽方面戦闘 171 津軽方面戦闘 172 津軽方面戦闘 173 津軽方面戦闘 174 津軽方面戦闘 175 津軽方面戦闘 176 津軽方面戦闘 177 津軽方面戦闘 178 津軽方面戦闘 179 津軽方面戦闘 180 津軽方面戦闘 181 津軽方面戦闘 182 津軽方面戦闘 183 津軽方面戦闘 184 津軽方面戦闘 185 津軽方面戦闘 186 津軽方面戦闘 187 津軽方面戦闘 188 津軽方面戦闘 189 津軽方面戦闘 190 津軽方面戦闘 191 津軽方面戦闘 192 津軽方面戦闘 193 津軽方面戦闘 194 津軽方面戦闘 195 津軽方面戦闘 196 津軽方面戦闘 197 津軽方面戦闘 198 津軽方面戦闘 199 津軽方面戦闘 200 津軽方面戦闘 201 津軽方面戦闘 202 津軽方面戦闘 203 津軽方面戦闘 204 津軽方面戦闘 205 津軽方面戦闘 206 津軽方面戦闘 207 津軽方面戦闘 208 津軽方面戦闘 209 津軽方面戦闘 210 津軽方面戦闘 211 津軽方面戦闘 212 津軽方面戦闘 213 津軽方面戦闘 214 津軽方面戦闘 215 津軽方面戦闘 216 津軽方面戦闘 217 津軽方面戦闘 218 津軽方面戦闘 219 津軽方面戦闘 220 津軽方面戦闘 221 津軽方面戦闘 222 津軽方面戦闘 223 津軽方面戦闘 224 津軽方面戦闘 225 津軽方面戦闘 226 津軽方面戦闘 227 津軽方面戦闘 228 津軽方面戦闘 229 津軽方面戦闘 230 津軽方面戦闘 231 津軽方面戦闘 232 津軽方面戦闘 233 津軽方面戦闘 234 津軽方面戦闘 235 津軽方面戦闘 236 津軽方面戦闘 237 津軽方面戦闘 238 津軽方面戦闘 239 津軽方面戦闘 240 津軽方面戦闘 241 津軽方面戦闘 242 津軽方面戦闘 243 津軽方面戦闘 244 津軽方面戦闘 245 津軽方面戦闘 246 津軽方面戦闘 247 津軽方面戦闘 248 津軽方面戦闘 249 津軽方面戦闘 250 津軽方面戦闘 251 津軽方面戦闘 252 津軽方面戦闘 253 津軽方面戦闘 254 津軽方面戦闘 255 津軽方面戦闘 256 津軽方面戦闘 257 津軽方面戦闘 258 津軽方面戦闘 259 津軽方面戦闘 260 津軽方面戦闘 261 津軽方面戦闘 262 津軽方面戦闘 263 津軽方面戦闘 264 津軽方面戦闘 265 津軽方面戦闘 266 津軽方面戦闘 267 津軽方面戦闘 268 津軽方面戦闘 269 津軽方面戦闘 270 津軽方面戦闘 271 津軽方面戦闘 272 津軽方面戦闘 273 津軽方面戦闘 274 津軽方面戦闘 275 津軽方面戦闘 276 津軽方面戦闘 277 津軽方面戦闘 278 津軽方面戦闘 279 津軽方面戦闘 280 津軽方面戦闘 281 津軽方面戦闘 282 津軽方面戦闘 283 津軽方面戦闘 284 津軽方面戦闘 285 津軽方面戦闘 286 津軽方面戦闘 287 津軽方面戦闘 288 津軽方面戦闘 289 津軽方面戦闘 290 津軽方面戦闘 291 津軽方面戦闘 292 津軽方面戦闘 293 津軽方面戦闘 294 津軽方面戦闘 295 津軽方面戦闘 296 津軽方面戦闘 297 津軽方面戦闘 298 津軽方面戦闘 299 津軽方面戦闘 300 津軽方面戦闘 301 津軽方面戦闘 302 津軽方面戦闘 303 津軽方面戦闘 304 津軽方面戦闘 305 津軽方面戦闘 306 津軽方面戦闘 307 津軽方面戦闘 308 津軽方面戦闘 309 津軽方面戦闘 310 津軽方面戦闘 311 津軽方面戦闘 312 津軽方面戦闘 313 津軽方面戦闘 314 津軽方面戦闘 315 津軽方面戦闘 316 津軽方面戦闘 317 津軽方面戦闘 318 津軽方面戦闘 319 津軽方面戦闘 320 津軽方面戦闘 321 津軽方面戦闘 322 津軽方面戦闘 323 津軽方面戦闘 324 津軽方面戦闘 325 津軽方面戦闘 326 津軽方面戦闘 327 津軽方面戦闘 328 津軽方面戦闘 329 津軽方面戦闘 330 津軽方面戦闘 331 津軽方面戦闘 332 津軽方面戦闘 333 津軽方面戦闘 334 津軽方面戦闘 335 津軽方面戦闘 336 津軽方面戦闘 337 津軽方面戦闘 338 津軽方面戦闘 339 津軽方面戦闘 340 津軽方面戦闘 341 津軽方面戦闘 342 津軽方面戦闘 343 津軽方面戦闘 344 津軽方面戦闘 345 津軽方面戦闘 346 津軽方面戦闘 347 津軽方面戦闘 348 津軽方面戦闘 349 津軽方面戦闘 350 津軽方面戦闘 351 津軽方面戦闘 352 津軽方面戦闘 353 津軽方面戦闘 354 津軽方面戦闘 355 津軽方面戦闘 356 津軽方面戦闘 357 津軽方面戦闘 358 津軽方面戦闘 359 津軽方面戦闘 360 津軽方面戦闘 361 津軽方面戦闘 362 津軽方面戦闘 363 津軽方面戦闘 364 津軽方面戦闘 365 津軽方面戦闘 366 津軽方面戦闘 367 津軽方面戦闘 368 津軽方面戦闘 369 津軽方面戦闘 370 津軽方面戦闘 371 津軽方面戦闘 372 津軽方面戦闘 373 津軽方面戦闘 374 津軽方面戦闘 375 津軽方面戦闘 376 津軽方面戦闘 377 津軽方面戦闘 378 津軽方面戦闘 379 津軽方面戦闘 380 津軽方面戦闘 381 津軽方面戦闘 382 津軽方面戦闘 383 津軽方面戦闘 384 津軽方面戦闘 385 津軽方面戦闘 386 津軽方面戦闘 387 津軽方面戦闘 388 津軽方面戦闘 389		



## 膨大な史料に裏打ちされた 幕末維新史

幕末史研究家 西澤朱実

戦記にして通史、各論にして総論——。川崎紫山の『戊辰戦史』をひとことで表現するなら、そうした言葉が浮かんでもらうことだろう。

実際、戊辰戦争を表題に冠する同時代の書籍の多くは、藩や個人など従軍主体別に編まれ、詳細ではあるが地域的・時間的に限定された断片的な各論の印象が強かった。それに対し本書では、慶応四年の鳥羽伏見から翌年の箱館まで各地で展開された戦闘を網羅しつつ、ペリー来航に遡り国内情勢の変化を丁寧に辿ることで、戊辰戦争という近代日本の一大ターニングポイントが出来する必然性を「前史」である「幕末」の中に位置づけ、地域的・時間的に連続し重層した歴史を活写する。維新史への総括的アプローチが乏しい時代に、戊辰戦争のみならず、激動の一時代を実質一〇四〇ページ（付録を除く）に集約した才腕と先見性は刮目すべきだろう。表題からありがちな内容を連想すると、良い意味で裏切られる本である。

著者の川崎紫山は元治元年、水戸藩士・川崎長蔵胤興の三男に生まれた。本名は三郎胤賛。旧藩校弘道館の伝統を継ぐ私塾「自強館」に学び、十七歳の頃上京して新聞記者となる。日本が東洋の盟主となり西欧列強に対峙すべしとするアジア主義者で、のち頭山満とともに明治三四年の黒龍会創設に参加。『世界百傑伝』や『訳註大日本史』の執筆、『西南記伝』『公爵山県有朋伝』『大日本憲政史』等の編纂員として知られ、昭和十八年に齢八十で没するまでに著書・編纂書合わせて五十点以上をものした健筆家である。

『戊辰戦争』は、紫山が三十歳の明治二六年十二月から翌年七月にかけ、全十二編の冊子形式で刊行された。一・二編が王政復古までの歴史的トピックをまとめた幕末史、第三編以降が戊辰戦争で、大小六十を超える戦闘が地域別・時系列に記録されている。

著者が水戸藩出身でアジア主義者でジャーナリスト——といふと、思想的にかなり偏ったイメージが先行しそうだが、本書は全編が膨大な量の史料に依拠しており、それ故に記述の正確さ・客觀性が保たれていると言つてよいだろう。原文の引用も多く、たとえば「開国党主義ノ論旨」の項では、該当する五三ページのうち、佐久間象山と横井小楠の開国論の引用にそれぞれ二二ページ・十八ページが費やされ、読み進めるのに苦労するほどである。また天誅組の大和挙兵では「大和日記」、桜田事変の項では襲撃者の一人・蓮田市五郎が自訴後に事件の概要を認めた手紙といったように、当事者の手記を含む第一級史料がふんだんにちりばめられているのも本書の魅力である。

主題である戊辰戦争の各巻においては、『太政官日誌』所

収の戦報がほぼ網羅され、『復古記』の原史料でもある諸家の記録類と合わせて、それぞれの戦いの経過と帰結、死傷者・捕虜の氏名や時には分捕り品に至るまでが、簡潔かつ遺漏なく記されている。同時に本書は、限られた紙幅の中でも船橋戦争のような単発で知名度の低い戦闘を割愛せず、馬場三九郎・河井平吉ら諸藩士の活躍や、「実戦二臨ミタルコト甚ダ尠ナシト雖トモ」遠州報国隊を特記するなど、時代の画期となつた内戦の全方位的な記録を試みる。さらに付録として収載された「北越戦記」（松代藩）・「南部征討記」（秋田藩）・「平戸藩羽州征討日記」と「会津戦争逸聞」の各エピソード、幕末史を彩る二九人の小伝がそれぞれに本編を補い、戊辰戦争とその時代をより多面的・立体的に読み解く鍵を示唆している。

その全編を貫くのは水戸藩出身者としての視線と矜持であると言つてよいだろう。本書では旧幕軍を「東軍」と表記し、徳川慶喜には「公」の尊称を付す。將軍個人と會議政体としての「幕府」を明確に区別し、「幕府」の糊塗・姑息を痛烈に批判する筆勢は御三家たる水戸藩の立ち位置そのものである。一方で、同藩が時代を動かす思想的原点でありながら、元治の内訌で疲弊し遂に維新の表舞台に立つことがなかつたように、紫山の視線もまた勝者・敗者のいざれどもなまく、まして完全な第三者のそれでもない。が、当事者としての熱を湛えながら正か否かあるいは官か賊かに分極化しないその視線こそが、奢りと恩讐の束縛を超えて歴史と向き合い、断片化する維新史を集約へと転化し得た最大のツールであり、それにより生成された連続する時間の堆積を前にして初めて、変化する思想と行動の壮大な集束過程としての「維新」の全容を認識することが可能になつたと言えるだろう。なお、敢えて本書の難点を挙げるとすれば、内容が多岐にわたる分、当然ながらそれぞれの戦記本に比べて記述の簡略さが否めないことだろうか。読者の中には物足りなさを感じる向きもあるかもしれないが、むしろ常に戻るべき俯瞰の場所として、詳細な各論の中心に置いておきたい本のひとつである。

余談ながら、比較的客觀的な記述に終始する著者が、庄内戦の冒頭では歴史好きの一個人に戻り、常勝軍を率いた大隊長・松平甚三郎と酒井吉之丞（玄蕃）、家老の松平権十郎を絶賛する様子が微笑ましい。勢い余つて甚三郎と吉之丞の字を逆に記す筆の滑りはご愛敬である。それにしても、庄内戦を記した金字塔『戊辰庄内戦争録』の刊行が二九年であることを考えれば、果たして紫山の典拠は何であったのか…。また人物小伝では赤報隊の金原忠蔵が本名の「竹内棟（廉太郎）」で収録されており、人選の基準が気になるところである。こうした出典探しや謎解きも、本書を読む楽しみの一つかも知れない。

今回、『戊辰戦史』はマツノの復刻希望アンケートにおいて圧倒的な人気だったと聞く。震災の痛ましい記憶が未だ癒えぬ昨今、本書の復刻が細くとも一條の光をもたらしてくれることを心から祈る次第である。